

# 『信貴山縁起絵巻』についての二、三の考察

——老僧の赤鼻としぐさ及び命蓮の装い——

D一四四二〇二 本 田 逸 朗

はじめに

『信貴山縁起絵巻』は初期絵巻物の名品であり、かつて実在し信貴山に住した僧命蓮を主人公とした奇跡譚が三巻の内に描かれている。そして三巻を眺め渡すと、命蓮以外にも様々な人物が描かれているのを見て取れる。詞書の中に具体的に記される訳ではないそれらの人物の表現からは絵巻作者の創意を汲み取る事が可能であろう。

本稿ではその様な人物の中で、「飛倉の巻」において長者の屋敷に居る老僧に注目したい。老僧の身体的特徴及び、冒頭の騒動を見やる時のしぐさからどのような人物像が窺えるのか。そしてその事がいかなる意義を持つのかという事について考察する。また、命蓮は紙衣という衣服を着していた事が詞書に示されている。この服が命蓮像にどういった影響を与えているかを掘り下げ、考察したい。

「飛倉の巻」冒頭は長者の屋敷の蔵が揺れ、中から命蓮の鉢が飛び出してくる場面から始まる。この場面を表す詞書は欠損していると考えられている。『宇治拾遺物語』『古本説話集』に絵巻とほぼ同内容の説話である「信濃国聖事」が収められているが、『宇治拾遺物語』から引用すると、左の如く記されている。

この蔵、すゞろにゆさ／＼とゆるぐ。「いかに／＼」と見さはぐ程に、ゆるぎ／＼と、土より一尺斗ゆるぎ上る時に、「こはいかなる事ぞ」とあやしがりてさはぐ。……さて飛行程に、人／＼見の、しり、あさみさはぎあひたり。

ここに記される揺れる蔵の様子は、絵巻画面上においては蔵の屋根瓦が落下している描写でその揺れの激しさが表されている。また、

本田逸朗 『信貴山縁起絵巻』についての二、三の考察——老僧の赤鼻としぐさ及び命蓮の装い——

これに驚く人々というのは、蔵の前で目をむいて手足を踊らせる下女達、板扉の向こうから駆けて来る男達、屋敷の縁の上で惑う長者達、同じく縁の上で蔵を眺めやる老僧と若い僧、という具体的な形を取っている。そしてこれら人物はただ漫然と描かれているという事はない。この様な人物を配した絵巻作者の何らかの意図が認められねばならない。

その一端を探る手がかりとして、縁の上で蔵を眺める老僧を取り上げて考えてみたい。

『信貴山縁起絵巻』には、老僧の他にも僧侶の姿が散見される。「飛倉の巻」の中にも右に挙げた若い僧や、鉢に乗って飛ぶ蔵に向かつて数珠を摺り合わせる僧等が見られる。阿部泰郎氏は命蓮―長者、命蓮―天皇の対立構造を前面に出した上で、これらの僧について、命蓮と対比的な存在として表わされていると述べられる。

〈長者〉という身分こそ賤しいけれど富裕なもの、一方、〈王〉という貴種の頂点に君臨するものに行いする〈聖〉の世界が護法の媒<sup>なだ</sup>ちによってあらわされる。〈聖〉は両者が与えようとする富や名誉を一顧<sup>ひと</sup>だにせず拒<sup>こは</sup>み、それゆえ却<sup>かえ</sup>って聖の威験は一層あざやかである。

絵巻では、そのあたりが両巻それぞれに聖と対比されてその無力をさらけ出す体制側の僧たち（飛倉）では長者の家に寄食する祈禱僧、「延喜加持」では勅使と宮門ですれちがう参内しよ

うとする護持僧）に託して表現し、そうした聖の尊<sup>たか</sup>さをより際立たせるのである<sup>2</sup>。

私もこの見解に賛意を表するものである。そしてこれを踏まえた上で、老僧の姿形から導かれる事を材料に、もう一步踏み込む事をしてみたいのである。

さて、この老僧の様子（図1）を今少し詳らかに述べるならば、以下の事が言えよう。数珠を掛けた左手を屋敷の柱に添えている。爪先立ちになって伸び上がり、屋敷の扉越しに蔵の騒動を眺めている。右手を顔の前に翳し、親指と他の四指の間から覗き見る様になっている。袈裟を掛け、僧服を着ている。鼻が赤く大きい。背後に鉢子と高坏に乗った膳がある。

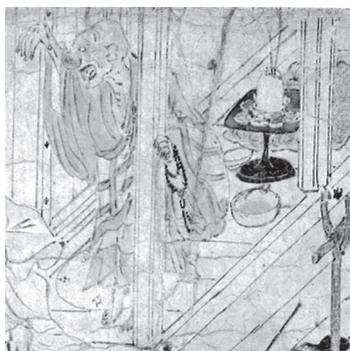


図1

『信貴山縁起絵巻』「飛倉の巻」  
 (『サントリー創業一〇〇周年記念展IV  
 特別公開 国宝信貴山縁起絵巻 図録』  
 より転載)

右に挙げた  
 事の内、特に目  
 を引くのは赤く  
 大きい鼻である  
 う。周囲の人物  
 の鼻と比べると  
 一際大きい。『絵  
 巻物による日本  
 常民生活絵引』  
 (以下「絵引」

と略称)はこの老僧を取り上げると共に、「赤鼻の僧」の項を立てて左の様に述べている。

鼻の赤くなる病は昔からあつて、『倭名抄』にもにきみばなの言葉があり、『医心方』にあかはたと記されている。この僧も大きい赤い鼻をしており、『信貴山縁起』では他の場面にも赤鼻が描かれているから、この頃はきわめて一般に見かけられたものと考えられる<sup>3</sup>。

これに従うと、老僧の鼻は「にきみばな」とも呼ばれた「赤鼻」という病であるとされる。ではこの病の具体相は如何なるものか。『絵引』の言及した二つの医書を見てみたい。

まず、『倭名類聚抄』では「皴鼻<sup>きび</sup>」として項を立てている。

皴鼻 野王案皴(音砂途岐美波奈) 鼻上皴<sup>4</sup>

ここでは、「皴」というものは鼻の上の皴であるとし、「皴」の音は「さ」で、にきみばなの事であると二行割で示している。「皴」の字を『大漢和辞典』によつて見ると、鼻の上のニキビ、もがさ、であると説明がなされる。よつて、「皴鼻」とはニキビやもがさのできた鼻を指す事になる。

次に『医心方』巻四では「治鼻皴方」として項を設け、その説明

と治療法について記す。

#### 治鼻皴方第十六

病源論云、此由飲酒熱勢、衝面、而遇風冷之氣、相搏所生也。故令鼻面間生皴。赤皴連々然者足也。和名安加波奈<sup>5</sup>。

『病源論』を引用して言うには、飲酒によつて顔に上つた熱が風に打たれる事によつて鼻や顔面に皴を生ずるとし、この病の和名が「あかはな」であると付す。

『倭名類聚抄』の述べる所は『伊呂波字類抄』等、他の古辞書類でも大きく変わらない。そして『医心方』が赤鼻の原因に飲酒があると説く所も、近世の医書である『病名彙解』に

鼻皴<sup>びっ</sup> 俗ニ云ザクロバナ酒ヲ飲人ニ多クハ生ズル故ニ又酒皴鼻  
ト云リ……飲酒ニ因テ血熱肺ニ入風寒を被リ鬱スルコト久シキ  
トキハ血凝濁シテ色赤ク

等とある如く、広く時代を通じて共有された見解であつたと見る事ができよう。絵巻作者もこれに従つていたならば、赤鼻の原因に飲酒があるという事が、老僧の人物像を考える上で目を留めるべき所となるう。

先に引いた『絵引』では、「なおこの僧の背後には片口の銚子があ

り、高坏に盛飯をし、それに箸がつき立ててある。坵飯おほひたといわれるものである。坵飯が客をもてなすために特別の食事であったことは当時の諸記録に多く見えている」と、老僧がもてなされていた事を指摘している。ここから、老僧がこの時食事中であると同時に酒を飲んでいたと見る事ができるだろう。

「延喜加持の巻」に見られる赤鼻の人物は、勅使が出立した後、画面手前の方で数人寄り集まって話をしている内の一人である。この人物の鼻も老僧のそれと同じ位に赤く大きい。よってこれが赤鼻を絵の上に表わす場合の「信貴山縁起絵巻」においては「標準的な表現となろう。翻して、老僧の鼻が赤いのは、一度の飲酒による一時的なものではないという事が明瞭になって来る。そして僧侶の身でありながら赤鼻となるという事は、日常的に飲酒を繰返して不飲酒戒を犯していたと見られるだろう。とは言えこれは特段珍しい事ではなく、当時不飲酒戒はそれほど厳格に守られていた訳ではない。例えば、『宇治拾遺物語』巻五十一「或僧、人ノ許ニテ氷魚盗食タル事」は、僧が食い意地を張らせて失敗した笑い話であるが、「これも今は昔、ある僧、人のもとへ行きけり。酒などをすゝめけるに、氷魚はじめて出でたりければ」とあり、まず酒を僧に出している。また、『徒然草』五十三段は、僧がふざけて破つた鼎が頭から抜けなくなるという失敗譚だが、こちらにも「是も仁和寺の法師、童の法師にならむとするなごりとして、をのく遊ぶことありけるに、酔いて興に入あまり」という、酔った末の事である。どちらの場合も特段構える

事無く酒を飲んでる様子である。持戒し修行をする僧が尊い事は変わりなくとも、周囲がこうした状況にあつてはもはや飲酒が極端な墮落を示すとも言えなくなってくるのではとも思われる。それは老僧の上にも当て嵌められる。従つて老僧は一般的ではあるが、俗に寄つた僧であると見る事が出来るのではないだろうか。

では次に、病としての赤鼻ではないが赤い鼻や特徴的な鼻を持つた人物はどのような目で見られていたか。これについても共通したイメージを探り、それを老僧の上に帰納する事ができるだろう。

赤い鼻というものは、古くは『万葉集』の中に見られる。左は巻十六の三八四一・三八四三番の歌である。

大神朝臣奥守の報へ嘘ひし歌一首

仏造るま朱足らずは水溜まる池田の朝臣が鼻の上を掘れ

大神朝臣奥守報嘘歌一首

仏造 真朱不足者 水溜 池田乃阿曾我 鼻上乎穿礼

穂積朝臣の和せし歌一首

いづくそま朱掘る岡薦畳平群の朝臣が鼻の上を掘れ

穂積朝臣和歌一首

何所曾 真朱穿岳 薦畳 平群乃阿曾我 鼻上乎穿礼

三八四一番の歌は池田某が「寺々の女餓鬼申さく大神の男餓鬼賜

りてその子はらまむ」と詠みかけて、大神奥守の瘦身を笑ったのに対して返した歌である。仏像を作るための真朱が足りないのだから赤い鼻を持つ池田朝臣の鼻の上を掘れ、と歌って、池田朝臣の鼻が赤い事を笑い返している。

三八四三番の歌も殆ど同じ様に、平群某が「童ども草はな刈りそやほたで穂積の朝臣が腋草を刈れ」と詠みかけたのに対して、平群の朝臣の鼻が赤い事を笑ったのである。

この二首を見るに、赤い鼻は瘦身・体毛と並び置かれて卑俗な笑いを喚起するものであったことが窺えるのではないだろうか。

さてまた、当時において赤い鼻は醜いとされていた。そのような特徴的な鼻を持つ人物で有名なのは末摘花であろう。左は『源氏物語』「末摘花」から、源氏が末摘花に出会った場面である。

まつ屋丈の高く、を背長に見え給ふに、さればよと胸つぶれぬ。  
うちつぎて、あななたわと見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。善賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方少し垂りて色つきたる事、ことのほかにうたてあり。

源氏は末摘花の欠点として、座高の高さ、額の広さ、瘦せぎすな様子等様々な物を挙げるが、鼻が象の様に高く長く、垂れた先の方に色がついている事を取り分け見苦しく思っている。女性と男性の違いはあるが、赤い鼻を持つ人物への評の代表的な例として確認し

ておく事ができるだろう。

また、説話の中にも赤い鼻の人物を拾う事ができる。「今昔物語集」巻二十六・十七「利仁將軍若時、從京敦賀將行五位語」に登場する五位がそうである。芥川氏の「芋粥」の原話として有名なこの話は、藤原利仁という人物が、芋粥を飽きる程飲んでみたいと言う五位を連れて敦賀の舅の家へ向かう。そこで「斛納釜共五ツ六ホド」に芋粥を作って見せた所、それだけで五位の食欲は失せてしまつて「一盛ダニ否不食テ、一飽ニタリ」ト云へバ、極ク咲テ集リ居テ、「客人ノ御徳ニ、暑預粥食」ナド云ヒ嘲リ合ヘリ」といった有様になつてしまつた。この話の内、利仁が五位を敦賀へ連れて行こうとする時に五位の姿態が記される。

鼻高ナル者ノ、鼻崎ハ赤ニテ、穴ノ移リ痛ク湿バミタルハ、  
糸モ巾又ナメリト見エ、

また、右の一文の前には「薄綿ノ衣ニツ許、青鈍ノ指貫ノ裾壞タルニ、同色ノ狩衣ノ肩少シ落タルヲ着テ、下ノ袴モ着ズ」、「狩衣ノ後ハ、帯ニ被引咄タルヲ、引モ不躑ハ、咄乍ラアレバ、可咲ドモ」と、服装に全く気を払っていない事が述べられている。鼻水を拭いもしない様子と合わせて、酷く不精な姿が窺え、利仁の掌の上で踊らされる道化になつている。

巻二十八・二十一「左京大夫□□、付異名語」における左京大夫

も似た様子である。この人物に「青経ノ君」というあだ名がついて笑いものになっていたので天皇が止める。しかし結局堀川の中將が混ぜつ返してしまつてあだ名はそのままになり、左京大夫は笑いののままであつた。

有様・姿ナム嗚呼也ケル。頭ノ鏡頭也ケレバ、頸ハ背ニ不付ズシテ、離レテナム被振ケル。色ハ、露草ノ花ヲ塗タル様ニ青白ニテ、眼皮ハ黒クテ、鼻鮮ニ高クテ色少シ赤カリケリ。唇ハ薄ク色モ無クテ、咲バ齒ガチナル者ノ、斷ハ赤ナム見エケル。音ハ鼻音ニテ高カリケリ。物云ヘバ一内響テゾ聞エケル。歩ビハ、背ヲ振り尻ヲ振テゾ歩ビケル。<sup>13</sup>

高く赤い鼻は「嗚呼」と捉えられ、それに並んで一風変わった特徴が列挙される。そして彼の名譽は回復される事がない。先の五位と大きく通じる人物像家になつていふと言えよう。今一つ、卷二十八・二十「池尾禅珍内供鼻語」を挙げよう。これも芥川の「鼻」で有名である。善珍内供の鼻は一際特徴的で、大きくクローズアップされている。

然テ、此ノ内供ハ、鼻ノ長カリケル、五六寸許也ケレバ、額ヨリモ下テナム見エケリ。色ハ赤ク紫色ニシテ、大柑子ノ皮ノ様ニシテ、ツブ立テゾ黻タリケル。其レガ極ク痒カリケル事

無限シ。

この鼻を湯がいて後鼻の脂を踏み出させたり、食事の時に鼻を持ち上げるのに失敗した童とのやり取りが弟子達の笑いを誘う事になつた。その一方で、善珍内供は僧として優秀であつた。「身淨クテ、真言ナド吉ク習テ、懃ニ行法ヲ修シ」た傍らでは、寺内の管理を良くし「寺ノ内ニ僧坊隙マ無ク住眠ハヒケリ」という状態にした。御蔭で「其ノ辺ニ住ム小家共員數出来テ、郷モ賑」わつた。こういった人物でありながら結局は「此レヲ思フニ、実ニ何カナリケル鼻ニカ有ケム。糸奇異カリケル鼻也」と、その鼻を取り上げては評され、「童ノ糸可咲ク云タル事ヲゾ、聞ク人讚ケル」という事になつた。笑い者としてしか人の口の端に上らなかつた人物である様に語られる。

以上の様な例を鑑みるに、赤鼻の老僧も、姿は醜く嘲笑に近い笑いを買つ様な人物であるという印象を与えられていると見る事ができるのではなからうか。そして、いかに立派な屋敷と蔵を持ち、蔵の中を無数の米俵で満たす事のできる様な長者であろうとも、この様な老僧を酒飯を以てもてなしている。この事が長者の俗な性格を規定してくるとも考えられる。そしてそれは次の様な事からも補強されると考へる。

## 二

先にも述べたが、「飛倉の巻」冒頭において、老僧は右手を目の前



図2

(中央公論社 日本絵巻大成2  
『伴大納言絵詞』より転載)



図3

(図2に同じ)

に翳して、親指と他の四指の間から一連の騒動を眺めている。これは「覗き見る」しぐさと解することができる。この

様なしぐさについて、常光徹氏が次の様に指摘している。突発的な事態に遭遇したとき、とっさに

手で顔を覆い、おそるおそる指の間から覗き見るのは本能的な動作でもあるが、同時にそれが異常な場面を見るときに類的なしぐさとして類

けに、火の粉や熱風をさえぎっているとも考えられなくはないが、それよりも異常な場面を見る時の類型化されたしぐさと理解したほうがよいと思われる。<sup>15)</sup>

このしぐさを取る人物の手の形は一樣ではないが、右で言われている『伴大納言絵巻』の当該場面を眺めると、老僧と同じ様に親指と他の四指の間から覗き見る格好をした人物(図2・図3)が見受けられる。従って老僧のしぐさにはそれらと同じ意味があると考えられるのも不可能でないだろう。

また、常光氏は『桑実寺縁起』で琵琶湖上に現れた薬師如来を眺める人々の中、『法然上人絵伝』で法然往生の紫雲を見上げる人々の中にも同様のこのしぐさをする人物が見られると指摘される。

ここで気を留めておきたいのは、応天門の炎上という事件は明らかに凶事、如来の出現や往生の紫雲は奇瑞で、種類が異なるという事である。どちらの事態にもこのしぐさは適用され得るという訳だが、老僧においては眼前の蔵の騒動をどの様に捉えてこのしぐさを行っているのか。はっきりと断定する事は難しい。僧侶である以上は飛鉢の奇跡を認め、蔵をも浮かすその験力に有難い思いを抱いたかもしれない。逆にただの異常事態としてしか捉えきれなかったかもしれない。あるいは両者が綯交ぜになっっているのかもしれないが、今まで見て来た老僧の人物像を思うと後者の比重が大きいのではないかと思われる。同じ僧である命蓮が引き起こした事態に対する老

型化されているのも事実である。平安時代末期から鎌倉時代初期の作といわれる『伴大納言絵詞』には、炎上する応天門を見上げる人々のなかに、扇の骨の間やひろげた五本の指の間から見ていると思われる人物が何人か描かれている。火事の現場だ

僧のこの様な反応は、老僧の格というものを一段低くしてしまおう。

### 三

それでは命蓮であるが、如何なる所が讃えるに足る、その偉大さを表すのか。ここでは命蓮が纏う衣服に注目したい。(図4) 命蓮の衣服については「尼公の巻」の詞書に左の如く記されている。

さて、「いかに寒くておはしつらん。これを着せ奉らんとして、持たりつる物なり」とて、懐より引き出でたる物をみれば、たいといふ物を、並べてのにも似ず、太き糸などして、厚々と細かに強げにしたれば、喜びて取りて着たり。もとは、紙衣をただ



図4  
『信貴山縁起巻』「飛倉の巻」  
(図1 出典より転載)

一つ着たり  
ければ、ま  
ことにいと  
寒かりつる  
に、これを  
下に着たれ  
ば、寒くも  
なくて、多  
くの年頃行  
ひけり。<sup>16</sup>

長年紙衣一枚で修行生活を営んでいた命蓮は、尼公に手渡された衲を身に付けた御蔭で暖を得る事ができた。従来ここで関心を集めて来たのは「衲」の方であった。そして紙衣の方はあまり興味を引いてこなかったのではなからうか。だが、これが命蓮の尊さを示す一つの道具として機能していると思われるのである。

紙衣とはどのような物かを確認しておく、『岩波古語辞典』では、「紙製の着物。厚紙に柿渋を塗り、日干しにした後、夜露にさらし、採み柔らげて作った衣服。もと僧が着用<sup>17</sup>」と説明される品物である。これが命蓮に対してどの様な意味を持つか。それは、夏見知章氏が紙衣と僧との関係について纏めた次の一文がそのまま命蓮の上にも当て嵌められるであろう。

紙の衣の歴史は、このように出家の草庵生活から始ったが、性空を先頭にして東大寺の仁鏡、比叡山の玄常、那智山の応照など、いずれも持戒持斎して、深山に道を求めた出家達は、皆その身に破れた紙の衣をまとって、ひたすら物的欲望を放下し去らんとしたものであることが「大日本国法華験記」「元亨釈書」等の一連の書によって知られる。物的欲望への執着を極度にきりつめた「簡素さ」が、実は紙の衣の大きな特質であった。<sup>18</sup>

これら僧達と紙衣について見ながら、命蓮と比してみよう。時代は下って近世の書であるが、『仏像標幟義図説』<sup>ぶつぞうひょうしぎぎずせつ</sup>は諸文献を参

照しながら僧侶の衣服について記している。その中の「紙衣」の記事は左の様になっている。

或称紙袍。亦呼楮衣。三教指帰(卷下)云紙袍葛襪二肩不蔽是也。同註(第五)云。紙袍。本朝俗。多為貧士之服也。古之隱僧襯之三衣。以資風寒。或為法服。蓋貧道之宜於衣服。莫之若者。元亨釈書(第十一)書写性空伝云。茅薦為席。紙楮為衣。隱逸伝(卷下)福可伝云。一日謝塵累。楮衣芒鞋。徧遊四方。按如二師蓋服之内衣。為其法衣者。如釈書(第十二)釈応照伝云著新紙法服。手執香炉是也。又扶桑往生伝(卷上)経源法師伝云。連日沐浴披自製紙衣。向阿弥陀像。合掌念仏而逝。是亦法衣賦<sup>19</sup>。

ここでは紙衣を二種あるとしている。服の内側に着る物と、法衣として着た物とである。絵巻詞書を素直に受け取るならば、画面上に表れる命蓮の装束は後者で、紙で作られている物である。しかし、そうである様には見受けられないのである。命蓮の装束を絵の上から判断すれば、「恐らく命蓮を始め、長者の家の客僧達の著けたものは素絹と同形にして布製である重衣と称する衣の様である」と考えられている。

勿論、紙の衣の質感を絵の上に表わす事は難しいだろう。なので絵師はこれを十分に描き得なかったかもしれない。或は命蓮の僧服の裾が目立って破れ綻びている所に、素材の性質上破れ易いだろう

紙衣の特質を読み取るべきなのであるか。

破れた紙衣を纏った描写は以下のように見られる。『三教指帰』「仮名乞児論」は空海自らを擬した、仮名乞児という人物に仮託して、儒教・道教に対する仏教の優位を説いている。紙衣が見えるのは、その仮名乞児の風貌を記した個所においてである。

夏則緩意披襟。对大王之雄風。冬則縮頸覆袂。守燧帝之猛火。橡飯茶菜。一句不給。紙袍葛襪。二肩不蔽<sup>21</sup>。

襟を開き、縮こまる事で暑さ寒さを耐えている。紙衣が両肩を覆わないのは、酷く綻びているからだろうか。その脆さや心許なさが窺えると思われる。

仁鏡の伝においても同様の事が見える。左は『大日本国法華験記』に記される、仁鏡が晩年に淨処を求めて愛宕山に住んだ時の様子である。

不求衣服。破損紙衣。单薄鹿布。或着破蓑或着鹿皮。外不耻人間。内不制寒氣<sup>22</sup>。

破れ損なわれた紙衣を着ている。『今昔物語集』に収められる仁鏡についての話にも「破タル紙衣・荒キ布ノ衣ヲ着タリ。或ハ破タル蓑ヲ覆ヒ、或ハ鹿ノ皮ヲ纏ヘリ」とあって、大きく変わりはしない。『元

「亨釈書」では、破れたという記述は見られず、「紙衣裘葛。恬度寒燥」とあるばかりになっている。また、往生伝に記されるような僧は皆尊き高僧ではあるが、仁鏡は「或時深夜欲洗手。時傾写水瓶無一滴水。欲汲水瓶水自滿」という事を見せている。『今昔物語集』巻十一、三十六「修行僧明練、始建信貴山語」において命蓮が「亦、訪人無キ時ハ、鉢ヲ飛シテ食ヲ継ギ、瓶ヲ遣テ水ヲ汲テ行フニ、乏キ事無シ」としているのと一脈通じるかとも思われる。飛鉢を操るのは高德の僧の証であり、そういった意味で、『今昔物語集』における命蓮は仁鏡と同類と見える。その仁鏡が紙衣を纏っているのは絵巻等における命蓮に繋がっても可い。

さてまた、性空上人については『今昔物語集』では紙衣を着した記述は無く、『朝野群載』にて初めて記され、『元亨釈書』も紙衣を着た記述をすると、夏見氏が指摘されている。命蓮についても、先に少し引いた『今昔物語集』の命蓮説話においては服装の記述が見当たらない。つまりこれらの場合は時代が下るにつれて付加されてきた要素の一つだと言いう事ができるだろう。

そしてこれら紙衣を着した僧達と同様、命蓮も「物的欲望への執着」はしない。それは蔵の中の米俵を全て長者に返却してしまったり、僧位や莊園の付与を断つた事から明らかである。畢竟、その様な尊い僧であるという命蓮の印象が作り上げられる中で、その一助として紙衣が纏わされる様になっていったのであり、逆に紙衣を纏っている事で命蓮を今まで見て来た様な高僧の系譜に入れられる様に

もなつたと言えるのではないだろうか。

また、西口順子氏は、具足戒の一部である「尼薩耆波逸提」の内、第四「取非親尼衣戒」、第五「浣故衣戒」を根拠として左の如く述べられる。

本来、僧の衣は親里（血縁者）から受けるべきものと定められ、衣の染色や洗濯も、親里の者がすることになっており、もし親里にあらざる比丘尼にさせたならば、その行為は戒律にそむくことであつた。<sup>25</sup>

そのため、これを厳密に適用させ得るならば、命蓮の様に山中に一人故郷を離れて修行をする僧が衣服を求めるのはしばしば難しいものとなつたであろう。

戒を守るためか、『扶桑往生伝』の経源法師の伝に次の様にある如く、紙衣を自作し、それを着する者もいた事が窺える。

興福寺経源学相宗。修密法。暮年染微疾。一日語弟子曰。三日後我当往。連日沐浴。披自製紙衣。向弥陀像。端座合掌。念仏而逝<sup>26</sup>。

この様に、命蓮の衣が自作のものであつた可能性もあるだろう。その紙衣一枚で長年の修行に耐えてきたが、尼公が持つてきた衲を

着ることによつて、命蓮は漸く身の平安を得る事ができたこととなる。それは命蓮の持戒の僧としての姿を浮き彫りにすると同時に、尼公の持つ様々な役割を強調することにもなる。それら、故郷の地が信濃であるという事、遙々と旅をしてきた事、自作の衲に込められた民俗的な力の意味などを今後考究していかなければならない。

### おわりに

以上見てきた様に、老僧は赤鼻という特徴から、その人物像は卑俗であり滑稽さを伺わせるものであることが言えると思われる。そしてそのしぐさからは、僧侶としての格がそれほどのもではなく、絵巻画面上において周囲の俗人達と大して変わるものではないということが示されていよう。

また、命蓮は紙衣を纏うとされる事から、他の紙衣を纏って修業した僧達の様に、高德の僧としての一面を見せているとすることができよう。しかしながら、やはり画面上紙衣には見えないという疑問は依然として残り、絵が詞書に忠実でない箇所があるという問題に突き当たつていかなばなるまい。

このように絵巻に描かれる姿・しぐさに注目していくと、そこに描かれる人物達がただの書き割りではない、血の通つた人間のようになり一人一人細かく描き分けられている事がはっきりと窺えるだろう。これを細かく掘り下げていけば詞章には書かれぬ絵巻の姿が見えてくるのではないだろうか。そして絵巻全体を良く見渡すことで、

主人公である命蓮の存在をより詳細にしていく事ができるだろう。

### 注

- 1 三木紀人・浅見和彦・中村義雄・小内一明校注『宇治拾遺物語 古本説話集』新日本古典文学大系四二 岩波書店 平成二年
- 2 阿部泰郎「山に行う聖と女人——『信貴山縁起絵巻』と東大寺・善光寺——」(網野善彦他編『西方の春 修正会・修二会』大系音と歴史と映像による日本歴史と芸能第三巻 平凡社 平成三年)
- 3 澁澤敬三編『絵巻物による日本常民生活絵引』第一巻 平凡社 昭和五十九年
- 4 馬淵和夫『和名類聚抄古写本声点本文及び索引』風間書房 昭和四十八年
- 5 正宗敦夫編『医心方二』日本古典全集第五期二 日本古典全集刊行会 昭和十年(私に句読点を付した)
- 6 蘆川桂洲著 貞享三年(一六八六)刊 国会図書館蔵本に依る。 塚飯の例は『左経記』寛仁元年十一月二十一日条、『小右記』寛仁二年十一月二十日条等に見られる。
- 8 1に同じ。
- 9 佐竹昭広・久保田淳校注『方丈記 徒然草』新日本古典文学大系三九 岩波書店 平成元年

- 10 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『万葉集四』新日本古典文学大系四 岩波書店 平成十五年
- 11 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出夫・藤井貞和・今西祐一郎校注『源氏物語二』日本古典文学大系一九 岩波書店 平成五年
- 12 森正人校注『今昔物語集五』新日本古典文学大系三七 岩波書店 平成八年
- 13 同前
- 14 同前
- 15 常光徹『しぐさの民俗学——呪術的世界と心性——』ミネルヴァ書房 平成十八年
- 16 小松茂美編『信貴山縁起』日本絵巻大成四 中央公論社 昭和五十二年四月 から詞書釈文。「たい」の字を私に改めた
- 17 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎『岩波古語辞典』岩波書店 昭和五十七年
- 18 夏見知章「紙子史に於ける芭蕉の位置について——「わび」の一系譜——」(『国語教育研究』第八号 広島大学学術情報リポ  
ジトリ <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00023686/>)
- 19 仏書刊行会編『大日本仏教全書七十三 服具叢書一』仏書刊行会 大正二年
- 20 鈴木敬三「信貴山縁起絵巻に現れた風俗」(『美術研究』第一五九号)
- 21 渡邊照宏・宮坂宥勝校注『三教指帰・性霊集』日本古典文学大系七一 岩波書店 昭和四十年
- 22 井上光貞・大曾根章介校注『往生伝 法華験記』日本思想大系七 岩波書店 昭和四十九年
- 23 池上洵一校注『今昔物語集三』新日本古典文学大系三五 岩波書店 平成五年
- 24 同前。
- 25 西口順子『女の力——古代の女性と仏教——』平凡社選書一一〇 昭和六十二年
- 26 愛媛大学図書館 鈴鹿文庫 天和三年版(六月二十日閲覧) <http://www.lib.ehime-u.ac.jp/SUZUKA/index.html>